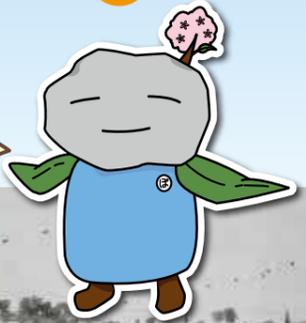


おお まち
大町を
かんが
知ろう・考えよう

大町町副読本

わたし
私たちの
ふるさとの
ことが
わかるよ



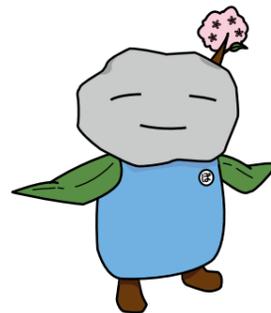
おおまち 大町 ちょう 町が きた道



はじめに

私たちには「生まれた日」があります。
 その日から私たちは様々な人やできごとに出会いました。
 私たちはそのできごとを『赤ちゃんだったとき』『学校に入る前』『卒業してから』など様々な区切りで思い出として記憶します。
 私たちがくらす大町も、「生まれた日」から今日まで、様々な区切りの中で多くのできごとに出会ってきました。
 人々が笑ったにぎやかな時代もありました。
 人々が泣いた辛い時代もありました。
 ある時は喜び、ある時は怒り、ある時は悲しみ、そしてまたある時は楽しんで、人々はその時代を懸命に生きてきました。そのような地域の思い出がとどめられた記録を、私たちは「歴史」と呼んでいます。
 今回はそのなかから「さむらいの国」から「近代国家」への道を歩んだ頃のことを中心に色々なことを調べてみましょう。日本の近代化に佐賀は大きな役割を果たしたといわれますが、では大町はどうだったのでしょうか。

わからないことは
しつもん
質問してください



ポタくん

ポタ山わんぱく公園の
 工事中に発見されまし
 た。掘り出された当初
 は、元気がなかったポタ
 くんですが、公園が開園
 し、たくさんの人たちが
 訪れるにつれ、頭に桜の
 花が咲き、元気を取り戻
 しました。

はい
よろしくおねがい
します



なかしま ふくも
中島 福母さん

歴史と食べ物
 が大好きな女の子。
 大町太郎さん
 と同じ小学部のク
 ラスメイト。



おおまち たろう
大町 太郎さん

元気いっぱい
 大町町の自然が
 大好きな大町ひ
 じり学園小学部
 の3年生。

目次

- 1 大町の生まれた日を知ろう P3
- 2 長崎街道について知ろう P4
- 3 横辺田代官所を知ろう P6
- 4 炭鉱のはじまりを知ろう P8
- 5 炭鉱が大きくなる様子を知ろう P10
- 6 炭鉱の終りを考えよう P14
- 7 昔の大町を考えよう P15
- 8 昔の道具から昔のくらしを考えよう P21
- 9 学校の移り変わりを知ろう P33
- 10 これからの大町を考えよう P36



1 大町の生まれた日を知ろう

大町町は昭和11年(1936)1月1日に大町「村」が「町」になって誕生しました。では大町町が今の大きさになったのはいつでしょうか。

記録では明治22年(1889)4月1日に「大町村」と「福母村」が合併して今の大きさになりました。今、皆さんが住所で使っている「大字大町」「大字福母」はそのなごりです。

では、大町村、福母村はいつできたのでしょうか。

江戸時代の古い地図(正保肥前一国絵図)には「上大町村」「下大町村」「福母村」そして「小通村」の名前を見つけれられますが、この地図は正保元年(1644)に幕府の命令によって作り始められ、正保4年に幕府に提出されたものです。それより前では慶長10年(1605)頃の地図に「大町」「福母」の字が見えますが、そこに書き込まれた石高(米の収穫量)からすると、後の大町村、福母村よりも広い地域を指しているようです。

大町も福母も約千年前から使われている地名ですが、それがいつ頃、どうやって決められたのかは残念ながらわかりません。色々な説があるので、調べてみましょう。



「村」は「むら」?
「ぞん」?

ここでは「むら」としていますが正確には分かりません。現在は「自治体コード一覧」という読み方が書かれたものがありますが、当時はそのような記録がないためです



2 長崎街道について知ろう

大町町内を東西にとおる町道が昔の「長崎街道」です。江戸時代に全国の街道が整備されますが、江戸幕府の将軍がいる江戸と大きな都市とを結ぶ街道、例えば「東海道」などはとても大切にされる一方、地方の街道の管理は地方に任されていました。しかし長崎街道は重要な港がある長崎とつながる街道だったので、地方の街道でもとても大切にされました。

長崎街道は長崎と小倉とを結ぶ道です。時代によって道が変わるところもありますが、主な道では途中に23の宿(旅人が泊まれる町)があり、その内11が今の佐賀県にあります。大町は宿ではなく小田宿(今の江北町)の一部と考えられていたようです。小田宿には本陣といわれる大名などが泊まる建物がありましたが、大町にはありませんでした。

多くの街道は地方の大名(その地方の殿様)が江戸と領地とを一年毎に行き来する「参勤交代」の通り道にもなりますが、長崎街道は外国との貿易を長崎の出島に限っていた時代に、出島にあるオランダ商館長(カピタン)が交替した時に将軍へあいさつのために江戸へ往復するカピタン行列や、外国から将軍へ贈られる珍しい品物や動物の通り道にもなりました。

例えば今は近所のお店で買える「白砂糖」も、この時代は外国から輸入するしかなく、出島から遠くなるほど値段も高くなります。出島に近い長崎や佐賀に昔から甘いお菓子が多いのは白砂糖が他の地域より



も手に入りやすかったからといわれることもあります。

また、日本にはいない珍しい生き物が将軍への贈り物として運ばれることもありました。享保14年(1729)には象が長崎から江戸まで歩いた記録が街道沿いに残っています。大町には象が通った記録はありませんが、前後に泊まった場所の記録からは通ったのではないかと考えられます。

上大町にある国の重要文化財「土井家住宅」は今から約200年前に建てられ、当時はお酒を造る酒屋だったと言われます。長崎街道を旅した多くの人々が記録を残していますが、その中の一人は『大町で酒屋に泊まって庭で珍しい鳥を見た。何という鳥かと聞くとカチガラスだと教えてもらった』という日記を残しています。

だれが土井家住宅に泊まったの？



カチガラスを見た記録しているのは「古川古松軒」という今の岡山県の学者。日記が書かれたのは土井家が建てられたと考えられる時代よりももう少し昔のことだけど、土井家は建て替えられた痕があるので建て替え前の建物に泊まったのかもしれない



3 横辺田代官所を知ろう

横辺田代官所は江戸時代の佐賀藩の役所の一つで、地方の年貢米を集めることが大切な仕事の一つでした。それ以外にも現在の役場や警察のような仕事も行っていました。

佐賀藩は寛永19年(1642)から幕府の命令で福岡藩と1年交替で長崎の警備にあたることになっていましたが、それにかかる費用は佐賀藩が負担しなければならないため、藩はいつも裕福ではありませんでした。その上、大雨や大風もたびたび起こり、第7代藩主鍋島重茂の頃から藩の財政(お金の出し入れの具合)がますます厳しくなってきました。当時、藩主(その藩の殿様)は自分の藩と江戸と1年おきに行き来する「参勤交代」をしなければならないと決められていましたが、重茂がその途中で具合が悪くなって泊まる日数が予定より長くなったためにお金が足りなくなり、仕方なく「後払い」で出発しようとしたが代金を払うまで引き止められたりと大変な苦勞をしたようです。

そのような佐賀藩をなんとか良くしようとしたのが第8代藩主鍋島治茂でした。治茂は佐賀城の近くに住んで仕事をしていた代官を担当する土地に住まわせて直接支配させ、藩の収入である年貢米を確実に集めるようにしました。これは寛政10年(1798)のことで、横辺田を含め3か所に代官所が置かれました。始めは3年間試してみるということでしたが、この仕組みがうまくいったので寛政12年(1800)には合わせて7か所に置かれることになります。

その後の文化2年(1805)に藩主が鍋島齊直に代わると費用節約のために横辺田と神埼の代官所が取りやめられて5か所になりますが、



てんぼうがねん(1830)に藩主が鍋島直正に代わりと横辺田代官所が復活、嘉永年間の風水害の後には諫早代官所が横辺田に合併されました。直正はこの他にも教育や技術開発に力を注いで幕末維新期に重要な働きをした他の6人と共に後に「佐賀の七賢人」と呼ばれます。

時代が明治に変わり、明治4年(1871)にそれまでの「藩」が「県」などに変わる「廃藩置県」が行われ、佐賀藩も佐賀県となりました。一期「伊万里県」「三潞県」「長崎県」など広さも名前もめまぐるしく変わりましたが最終的に明治16年(1883)に今の「佐賀県」となりました。

今、横辺田代官所があった場所に当時の建物などはありませんが、代官所は明治維新後にその役目を終えるまで存続し、佐賀藩から佐賀県へ変わる様子を見守りました。

さがはん かね な
佐賀藩、お金が無
かつたんだ……



むだづか
無駄遣いしたのではなく仕方が
ない事情もあったんだ。特に幕
末は節約した分を教育や研究に
つか さいだいか すす
使って近代化を進めたのが佐賀
はん
藩だよ



4 たんこう し 炭鉱のはじまりを知ろう

江戸時代の後半ごろから、家庭用の燃料などに少し使われるだけだった石炭は、しだいにその使い道が広がっていきます。長崎街道を通った出島オランダ商館の医師シーボルトは文政9年(1826)におそらく福母と思われる「ウクモト(wukumoto)で炭坑を見た」と「江戸参府紀行」に記していて、この頃にはすでに大きな組織として石炭を掘っていたようです。

佐賀県内で最も早い炭鉱は寛政4年(1792)、今の唐津市にある相知村で始められました。佐賀県内の炭鉱はまず今の唐津市周辺で始まり、次いで多久地区や杵島地区に広がっていったようです。

石炭は燃える時にたくさんのススを出し、臭いもするので料理などには使いにくい燃料です。しかし海の水を煮詰めて塩を作ったり、瓦を焼いたりするためにはよい燃料であることがわかり、盛んに使われるようになります。

石炭がとれる藩は、石炭を掘るためにはお金を納めなければならないという決まりを作って、掘る人からお金を集めました。それでも儲けがでるほどよく売れたようです。

同じ頃、福岡県の筑豊地方にも炭鉱はありましたが、長崎の港で蒸気船の燃料として石炭が必要になると、より近い唐津地区の石炭がより多く求められるようになりました。しかしたくさんの石炭を掘り出すため坑道(トンネル)を深くしていくと水がたくさん湧き出したり、空



気が悪くなったりするので、水は地上に出し、きれいな空気を地下に入れないと石炭を掘ることができません。そのために早い時期から水をくみ出したり、空気を入れ替えたり、掘った石炭を地上に運び出したりするための機械化が進み始めました。

やがて江戸時代から明治に変わり日本が一気に近代化への道を進み始めるのと同じく、炭鉱はより大きな規模になっていきます。機械化が進んだ外国から大型機械を買えるような炭鉱はよりたくさんの石炭を掘り出してさらに大きくなる一方、機械が買えない炭鉱は小さく浅い炭鉱のままでした。

「大町町史」は明治18年(1885)5月23日の佐賀新聞から「福母村大串炭坑はスペシャルポンプと蒸気機械を三池鉱山局から譲ってもらった」という意味の記事を引用しており、この時期に機械化されたことがわかる一方で、明治14年と翌15年には「ポンプを使える人をやとえない」から休業したことも知られます。炭鉱は値段が高い機械を買い、それを動かせる技術者をやとえる大きな組織でなければ続けられないようになっていきました。

結局、大町ではいつだれが始めたの？



江戸時代の終り頃からたくさんの人たちが関わったとしか言いようがないけど、明治初めに大串又左衛門が近代化の道をつくり、大正時代に中島徳松が巨大化の基礎をつくり、昭和初期までに高取伊好が会社として統一した様子をこれから見てみよう



5 炭鉱が大きくなる様子を知ろう

多くの資料が杵島炭鉱は明治42年(1909)に高取伊好という人が始めたとしていますが、この年にいきなり炭鉱を始めたわけではなく、以前から他の人々があちこちに開いていた炭鉱を合わせて会社にしたのです。まずは杵島炭鉱の始まりに関わる主要な一人、大串又左衛門について見てみましょう。

杵島地域の炭鉱の始まりは意外に古く、文久～慶応の頃(1860年代前半)には福母で始っていたようです。大串又左衛門の家はたくさん持っている農地を他の人に貸して収入を得る地主でしたが、天保13年(1842)に佐賀藩が小作料免除(地主に土地の借り賃を払わなくてよいとする仕組み)を出したためにそれに代わる収入の手段として福母炭坑を経営し始めますがなかなかうまくいかず、新しく石炭を買ってくるところを探すために佐賀を離れたりもしました。明治11年(1878)に故郷に戻った後も、前に書いたように機械を買ったり、それを使える技師を探したりと苦労が続きました。

ようやく順調になってきた明治24年頃、他の炭鉱でもどんどん石炭が掘り出されるようになったため値段が安くなってしまい、ついに明治27年(1894)には自分で続けることをあきらめ、石炭を掘る権利を人に与えてその料金を石炭でもらって売るように変わります。

ところがその直後の同年8月、日清戦争により石炭は急に値上がりします。どんどん石炭が売れたお金で明治32年、北方村(現在の武雄



市北方)で大串銀行を始めるまでになりました。当時の大串家の屋敷は、今の住宅十数軒が建つほど広がったといわれています。

石炭が高くなると石炭を掘る権利もとても高くなったので、掘っていた人たちは石炭を掘れると約束していた期間の残りを、近くで赤坂口炭坑を経営していた高取伊好に譲りたいと考えました。始め又左衛門はこれに反対しましたが、伊好も強く望んだため、ついに福母炭坑を譲り渡すことにしました。「大町町史」では明治34年(1901)7月のこととしています。福母炭坑ではその後石炭を掘らなくなりますが、後の杵島炭鉱の基礎となりました。

もう一人、中島徳松も大切な役割をした人です。中島徳松は明治8年(1875)福母村の大串炭坑で働く家に生まれ、17歳の時に伊万里地方で自営の炭坑を始めました。明治32年(1899)には筑豊地方へ出て多くの炭坑に関わり、大正4年(1915)には嘉穂郡穂波村(現在の福岡県飯塚市)で大徳炭坑を開発、これが後に飯塚炭鉱とよばれる大炭鉱に成長します。大正7年(1918)に中島鉱業株式会社を設立すると故郷・大町でも大谷口炭坑を買って佐賀炭坑と名前を改め、整備に取りかかっていますが、ここから石炭の町・大町の発展が本格化したと言えます。

「大町町史」から当時の産業別の家の数を見ると、大正8年(1919)に99戸だった工業(工場などで働く人)の家は翌9年には1,399戸と急増え、また商業(お店などで働く人)の家も138戸から245戸へと増えています。大正8年は中島徳松が佐賀炭坑の経営に力を入れて、大

町が大きな炭鉱の町に変わっていく年だったと言えます。しかし佐賀炭坑は大正9年からの経済不況(世の中の景気が悪くなること)に直面します。

良質の石炭が大量に取れると期待された佐賀炭坑ですが、本格的に掘り始めてすぐの大正9年(1920)3月に突然、日本中の景気が悪くなってしまいます。それまでたくさん必要だった石炭が急に要らなくなったためですが、たくさん売れる時代に合わせた設備を急に小さくすることはできません。また大きくした設備の支払いもあります。各地の炭鉱の多くがお金が足りなくなり、休業や倒産が相次ぎます。

佐賀炭坑では炭坑そのものを担保に借りていたお金が返せなくなり、その年の10月に炭坑は銀行に渡されます。その後大正15年(1925)に銀行は高取鉱業に炭坑を任せ、中島徳松は活動の場を筑豊に移します。引き継いだ高取伊好はこれを杵島第3坑として整備、後の杵島炭鉱の中心としました。

高取伊好は幕末に多久に生まれ、成長してからは東京で鉱山について勉強し、国の技師となって長崎県の高島炭坑で働きました。明治15年からは民間の技術者として長崎や唐津の炭鉱で働きますが、機械化するためのお金を集められずに炭鉱を大手企業に安く買われてしまうなど苦勞が絶えませんでした。しかしあきらめずに杵島地区に移り、明治42年(1909)に杵島炭鉱を始めます。炭鉱が大きくなるにつれて、人もどんどん増えて、町の人口は一時2万人を超えたこともありました。小学校で4千人、中学校で2千人近くの子供達と一緒に勉強した時代もありました。



石炭は大きな製鉄所で鉄を作るためにも使われました。国中に人や物を運ぶ蒸気機関車や汽船の燃料にもなりました。塩や陶磁器を一度にたくさんつくるためにも軍艦の燃料にも使われました。そのようにして幕末から明治にかけて国が大きく変わる原動力ともなりました。それから昭和40年代まで、石炭はエネルギーの主役として、化学工業の重要な原料として、日本の産業を支えてきました。当時を知る人は「夜、列車に乗っていると、それまで真っ暗だった周りの景色が杵島炭鉱の辺りだけはまぶしいくらい明るかった」と思い出を話していました。炭鉱は交替で24時間掘り続けるので、文字通りの「眠らない街」だったのです。

みんな眠らずに働いたの？



朝から夕方までの一番方、夕方から深夜までの二番方、深夜から朝までの三番方に分かれて交代で働いていた。だから昼間に眠る人もいるし、夜中に働きに出る人もいる。いつも誰かが働いているから、町には人通りが絶えなかったそうだよ



6 炭鉱の終わりを考えよう

いつまでも石炭は高く売れると多くの人が考えていました。しかしいつの間にかエネルギーの主役は石炭から石油に変わっていきました。国も、多くの人も、石炭より石油の方が都合がいいと考えるようになりました。

石炭は掘っても高く売れなくなり、続けることが難しくなった炭鉱は日本中で次々に「閉山」していきました。杵島炭鉱も昭和44年(1969)に閉山し、大町から炭鉱は姿を消しました。

炭鉱が無くなったのは、石炭がとれなくなったから？



石炭は使われなくなったの？



日本の石炭を使ってくれたらよかったのに



石油や石炭が輸入できなくなったら私たちの生活はどうなるの？

掘れば石炭はまだあったけど、掘っても高く売れなくなったから

石炭は今でも使われているよ。外国産がね





7 昔の大町を考えよう



昭和30年頃の大町駅です。今と違い多くの線路がありますが、石炭を運ぶためです。六角川の船と並んで石炭輸送の多くを担った鉄道で貨車をけん引したのは蒸気機関車で「石炭が石炭によって運ばれる」時代でした。情報プラザにある「9600型蒸気機関車」も、路線は違いますが石炭輸送に活躍しました。長いクレーンやベルトコンベア、奥にはトロッコも見え、当時の石炭輸送の様子がわかります。

他にも色々な写真があるので、写されたものから当時の様子を想像してみましょう。



炭鉱の貯木場です。現在の港町付近から北西を見えています。坑内の天盤(天井)を支える枠の材料となるのが坑木で、六角川を船で輸送され、ここに集められました。

たくさんの坑木が山積みされている様子が写るこの写真には「杵島砒業所で使う量の2ヶ月分」という意味のメモ書きがありました。

たてもの
どんな建物が
ありますか？



えんとつ
煙突は
どこにある？





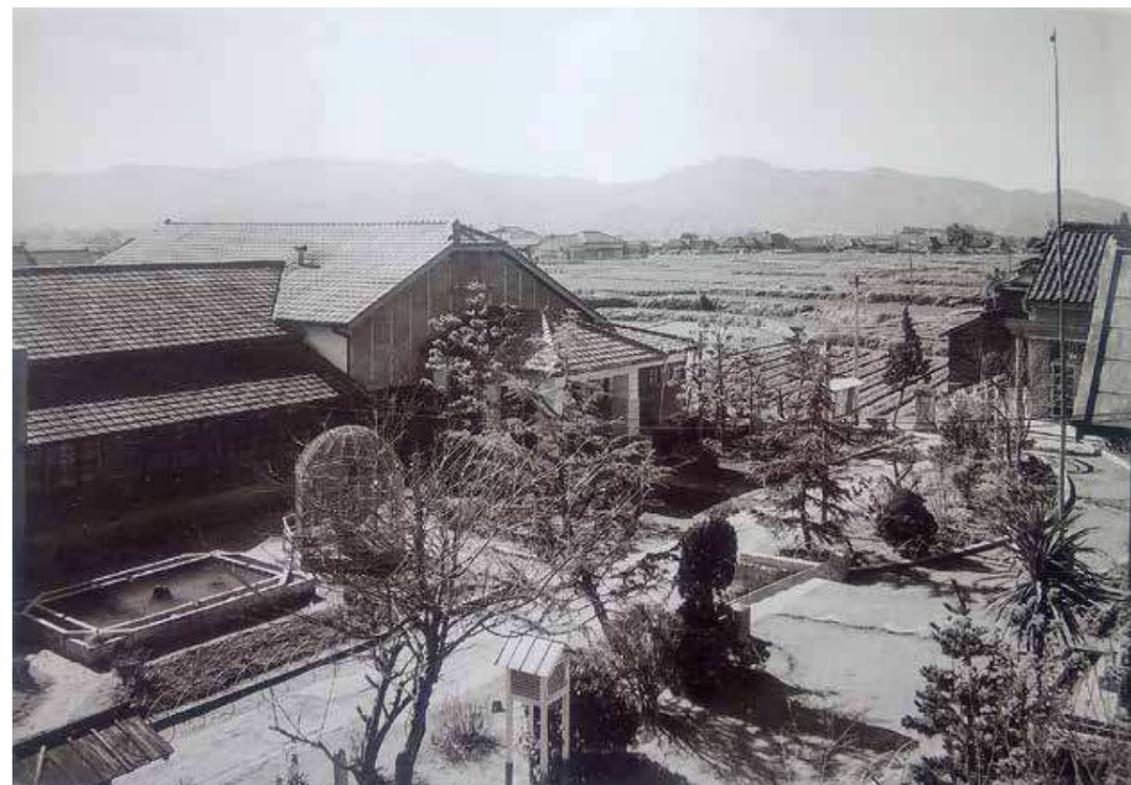
六角川の棧橋（船をつけて人や荷物を積み下ろしするための施設）付近です。たくさんの船が見えますが、この写真には「この町の港に籍を置く船は140隻」という意味のメモ書きがありました。

六角川を下った船は河口の住之江港で大型船に石炭を積み替えていました。

ふね たか はしら
船の高い柱は
なん
何だろう？



どうやって
せきたん
石炭を
つ
積んだのかな？



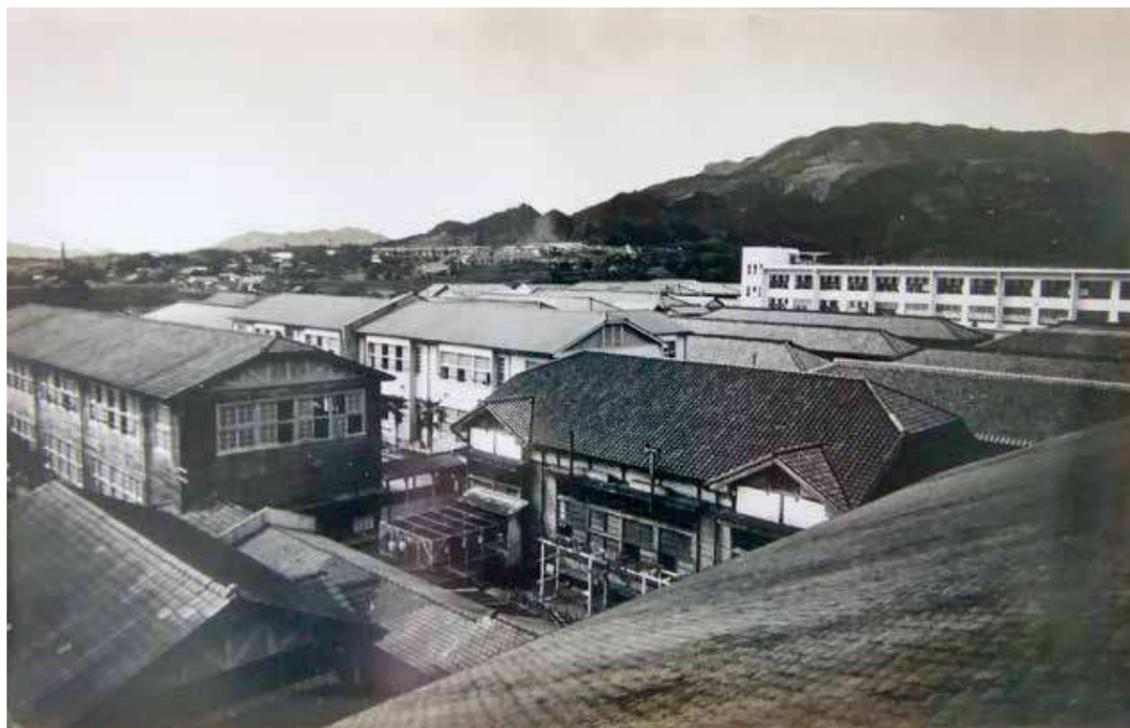
昭和36年度の大町中学校卒業記念アルバムからです。現在新校舎が建っている辺りから南西を見えています。鉄筋二階建ての西校舎が建築されるのはこの翌年度になるので、まだ姿は見えません。

この年、中学校には36学級 1,791名の生徒がいました。昭和33年に4千人を超えた小学生たちが中学生になっていった時期です。

いま がっこう な
今の学校に無いものが
たくさん写っている



とお み まち ようす
遠くに見える町の様子は
どうだろう？



前のページと同じ頃、南側にあった講堂（集会などをする広い建物）の屋根から北西向きに撮影されたようです。平屋や二階建ての木造校舎の奥には昭和32年度（1957年～58年）に完成した3階建ての鉄筋校舎が見えます。

この頃の学級数や児童数はどれくらいだったのだった？



運動会や修学旅行はどんな様子だったのだった？



昭和10年頃の大町尋常高等小学校（後の大町小学校）の全校集会の様子です。男性の先生は背広、女性の先生は袴を着ています。児童は洋服と和服の両方がいるようです。別の角度から撮影した写真には「児童数が増えたので拡声器を導入した」という意味のメモ書きがありました。

子供達はどんな履物を履いていたのかな？



どうしてこんなに児童数が増えたのだった？



8 昔の道具から昔の暮らしを考えよう



これは炭鉱時代のマーケットの写真です。

この頃は肉も魚も野菜も、重さで値段が決まる「量り売り」が主なので、そのための秤が何台も見えます。商品は経木（紙のように薄い木の板）に包み、さらに頭上の古新聞で包まれて手渡されます。買った人はそれを自分の買い物かごに入れて持ち帰ります。

いまの買い物と、
ちが
どこが違う？



売る人、買う人の
てま
手間は
どう変わった？

いろいろな昔の道具を見て、道具と暮らしの変化、そして未来について考えてみましょう。



ゆのしき
湯熨斗器

よく似た形の「炭火アイロン」もありますが、これは底に蒸気を吹き出す孔があり、蒸気で布地のしわを伸ばします。中に炭火などと水を入れて使いますが、孔からお湯が吹き出したり、動かした時にお湯がこぼれたりしないよう工夫されています。

いまのアイロンは
どうやって
あつ
熱くなる？



いまの服はシワシワに
なるかな？



しちりん もくたん
七輪 (木炭コンロとも)

熱を通しにくい素材の本体に小さく割った薪や炭、豆炭や炭団(石炭の粉をノリで固めたもの)などの燃料をいれて主に調理に使います。下の窓の開き具合で火力も調整でき、少ない燃料で煮炊きできるのでカマドがある家でもよく使われました。

いま どうぐ
今の道具は
なんだろ?



いま つか
今では使われない
のかな?



は がま
羽釜

カマドの上部にぴったりはまるようになっています。下から薪などの燃料を燃やして加熱します。中ほどのツバ(羽)から下は火があたるのでススで黒くなります。大小のサイズがあり、用途によって使い分けられるためカマドにも大小の穴がありました。

いま どうぐ
今の道具は
なんだろ?



いま つか
今では使われない
のかな?



とっくり
徳利 (または「とくり」)

酒や醤油、油など液体の保管や輸送に使われました。

これを持って店に行き、欲しい分を計って入れてもらうのが当時の買い方です。左側のように酒店の名前が書かれたものは特に「通徳利」と呼ばれ、店からお得意さんに貸し出された買い物用のものです。

い
ま
今ではどうやって
か
もの
買っている？



む
かし
いま
か
もの
昔と今の買い物で
はど
ち
が
違
う？



ます
「五合ます」のように入る量を頭に付けることも多い

1合 (約180ml)、2合、5合など決まった量を量ります。米や豆などの穀物の他、油や酒など液体の計量にも使われました。前のページの徳利のような入れ物を持って買い物に行くと、店はこれで量って入れてくれました。

い
もの
な
入れ物が無いと
か
もの
買い物ができな
いのは不便？



い
ま
ほか
こと
今では他の事にも
つか
使われている
ような…



べんとうばこ
弁当箱

うす やなぎ あ つく べんとうばこ
薄くした柳を編んで作られた弁当箱です。おにぎりや漬物、焼き魚
などが入れられたのでしょうか。

すきま おお しいるけ おお い べんとう いた
隙間が多いので汁気の多いおかずは入れられませんが、湯気がこも
らないので弁当が傷みにくかったともいわれます。

いま べんとうばこ
今の弁当箱とは
ちが
どこが違う？



いま つか
今では使われ
ないのかな？



じしょう
時鐘

じどうてき なる チャイム より 前は、せんせい よう むいん
タイマーで自動的に鳴るチャイムより前は、先生や用務員さんがベ
ルを鳴らし、でんき なる ベル より 前は、この よう な かね こうじ し
電気で鳴るベルより前はこのような鐘で校時を知らせて
いました。がっこうじゅう き 聞こえる よう に かなり おお き な おと
学校中に聞こえるようになり大きな音がします。

おと
どんな音がする
んだろ？



がっこう
学校のどこに
あったのかな？



こたつ ほや あんか
(炬燵の) 火屋 (または行火)

ひら すや がき (くろくてかたかわらのような焼き物) に入れた炭火などを中に入れて布団の中で温まるためのもの。これが後に足のある台を置いて布団をかける炬燵になります。

いま こたつ
今の炬燵はどうやって
あたた
温かくなる?



こたつ な うち
炬燵が無い家も
ふ
増えている?



わらじ あしなか
草鞋 (これは足半)

まえ はな お あし おやゆび ひとさ ゆび あいだ ではさみこみ、ほそ ひも をかかるとに回して前で結びます。長さが踵までである「草鞋」と、足の裏の中ほどまでしかない「足半」があり、これは足半です。軽く柔らかで滑りにくいことから現在でも沢登りなどで愛用されているそうです。

す ぎ
すぐに擦り切れそう
あと
だけど後は
どうしたんだろ?



いま つか
今でも使われる
き かい
機会はないのかな?





9 学校の移り変わりを知ろう

江戸時代の子供達の教育は「読み書き算盤」といわれる寺子屋での手習いでした。

大町では寺子屋がどこに何か所あって、どんな人がどんなことを教えていたか、どんな人たちが学んでいたかは残念ながら詳しく分かりませんが、おそらく数か所の寺子屋があり、少なくはない子供達が勉強を教わっていたと考えられています。

明治5年(1872)に新しい学校の仕組みである「学制」が作られると、その後は学校での教育に変わります。「大町町史」に引用された「佐賀県教育五十年史」によれば明治8年(1875)には「大字大町に大町小学校、大字福母に含文小学校を設け」とあり、また同じく町史は「明治5年の学制発布により大字大町は華山小学校、大字福母は含文(ふくもん)小学校と称した。明治8年、この両校は併合して大磨智小学校と改称した」とする「通説」にも触れています。「含文(ふくもん)」は「福母」のあて字だったかもしれません。

この時期は残された資料が少なく、学校がどのように移り変わったのかを正確に知ることはできません。

「大町町史」だけでも

- ・明治8年に大磨智小学校となったこと
- ・明治11年(1878)に「花山小学校を大町小学校に名前を変えた」と届け出たこと
- ・明治18年(1885)の「公立中等大磨智小学卒業証書」の写真などが掲載され名前がつながりません。また大町小学校の「創立百周

年記念誌」の年表では明治20年(1887)に「大町尋常小学校」と名前を変えたことになっていますが、町史には明治25年(1892)の「尋常大磨智小学校修業証書」が載せられるなど、やはり名前がつながりません。

これは「もしかしたら」の話ですが、国などに届け出るような書類には「大町」など正式の名前をつかい、学校内では「大磨智」などを使ったのかもしれませんが、それをはっきりさせることは今のところできません。

その頃の様子を明らかにできませんが、「大磨智」「含文(ふくもん)」の文字からは当時の人々が教育にかけた思いが伝わってくるようです。

その後、炭鉱が大きくなっていく頃の学校も見てみましょう。「大町町史」で調べると、大正2年(1913)から大正6年までは650人前後だった児童数が、大正7年(1918)には754人、翌8年には985人と増え始め、大正9年(1920)には1,229人と千人を越えます。児童数が急増し始める大正7年は、炭鉱が大きくなり始める節目と言えるでしょう。この後も炭鉱の発展とともに児童生徒の数も増え、大正9年から昭和9年まで毎年校舎が増やされることとなります。

記録では大正7年(1918)まで校舎3棟に14学級だった学校は、昭和7年(1932)には校舎17棟に60学級にもなっています。これだけの校舎を建築するにはたくさんの費用が必要ですが、炭鉱からの税収に加え、寄付もあったことがうかがえます。

戦中・戦後も校舎は増え続けますが、昭和30年代になると増加する児童数に追い付かなくなり、またこれまでの木造校舎が古くなったこ



ともあって、昭和31年(1956)から古い木造校舎3棟を解体し、鉄筋コンクリート3階建ての校舎を建築することになりました。その費用は当時の大町町の予算(1年間で使う全てのお金)に近い6,865万円にもなり、建築ブームによる資材不足もあって完成は昭和33年(1958)9月になりました。

そのころ炭鉱は年ごとに景気が悪くなっていました。児童数は昭和34年から減り始めますが、より良い教育のため特別教室や体育施設などの整備が続けられ、その歩みは今日につながります。

平成23年(2011)に校舎は別々のままで小中一貫校になり、平成25年10月には小中が一つになった新しい校舎が完成。それまで愛称として使っていた「大町ひじり学園」が正式な名前になります。そして平成28年(2016)4月からは九州初の「義務教育学校」になりました。



ぎ む きょういくながっこう
義務教育学校って
どんな学校?

いっかんこう い じょう しやうちゅう むす
一貫校以上に小中の結びつき
が強い学校といえるかも。小中
の枠を超えた授業や、小学生と
中学生が一緒に活動できるなど、
9年間勉強する上でいいことが
たくさんあるんだ



10 これからの大町を考えよう

新校舎が建設された前の中学校運動場の地下には、昔の遺跡が一部残されていました。遺跡を未来へ残すことの大切さと、ここに学校を建てることの大切さをよく考えた結果「遺跡は記録で残し、予定通り校舎を建てる」ことになりました。

たくさんの方が発掘調査の作業にあたり、この一帯を治めていたと思われる人の館があった可能性が高いことがわかりました。今からおよそ800年ほど前には、すでに多くの人々がこの地で暮らしていたのです。

さて、今から800年後を想像してみてください。

今私たちが生活している町の、住んでいる家の、使っている道具の、何が残されているのでしょうか。

私たちが何を考え、どんな暮らしをしていたかを、未来の人たちはどのように想像するのでしょうか。



わたし いま じだい
私たちの今はどんな時代
だったと未来の教科書に
書かれるのかな

それは誰にもわからない。
だけど、大切な資源、きれいな海や空、
多くの生き物などが人の勝手な都合
で無くなってしまった悪い時代だった
と書かれないようにしないとね



おわりに ～あとがきにかえて～

日本が「さむらいの国」から「近代国家」へ方向を変えた幕末維新の時代。方向を変えるのが急すぎて、あちこちで困ったことも起きたようです。その一つが古くから伝わる多くの仏像などが「近代化の妨げ」と誤解され捨てられてしまったことです。

千年以上にわたって大切に守られてきた物も、捨てられる時は一瞬です。人の手で捨てられなくても、事故や災害で失われることもあります。だから文化財は、その時代そこに暮らす人たちが力を合わせないと守ることができません。でも、その人たちが文化財の事を正しく知って『大切にしよう』と思ってくれないと、どうしようもありません。

そのためにはどうしたらいいのだろう。

大町の人たちに、大町の歴史を大切に思ってもらい、大町の文化財を正しく未来へ伝えてもらうためにはどうしたらいいのだろう。

この本は、その答えの一つになればいいなと思って作られました。

私たちにも何かができるの？



興味を持つこと
 知ること 考えること
 それを誰かと話しあうこと
 そして
 大町を好きだと思うこと
 それは君たちにしかできないこと



参考文献 ～この本を作るために参考にした本～

「大町町史」上・下巻 大町町史編纂委員会, 1987
 「創立100周年記念誌」大町町立大町小学校, 1976
 「肥前叢書」肥前史談会, 1973
 「佐賀縣石炭史」井手以誠, 1972
 「石炭産業の史的展開」坪内安衛, 1999
 「石炭研究資料叢書」第6輯・第7輯 九州大学石炭研究資料センター, 1985・1986
 「肥前路を行く 江戸時代の佐賀の道」佐賀県立博物館, 2006
 「長崎街道-世界とつながった道」九州歴史資料館, 2012
 「大町町文化財調査報告書第1集 今寺遺跡」大町町教育委員会, 2013
 「参勤交代」丸山雍成, 2007
 「江戸時代を「探険」する」山本博文, 1996

大町を知ろう・考えよう

2019年3月20日

編集・発行 大町町教育委員会事務局
 〒849-2101
 佐賀県杵島郡大町町大字大町5017

制作・印刷 福博印刷株式会社

【明治維新150年】

- 本書の内容の一部または全部を無断転載することを禁止します。
- 本書の内容の複製または改変などを許可なく行うことを禁止します。
- 本書の内容に関しては、将来予告なく変更することがあります。